

報告 1：中兼和津次（東京大学名誉教授）

空想から現実へ——マルクス、レーニン、毛沢東、鄧小平に見られる
社会主義像の変遷——

ロシア革命が中国共産党と毛沢東にとって、政権樹立とそのための革命闘争に多大な、というよりも決定的な影響力を与えたことは言うを俟たない。ロシア革命があったからこそ中国共産党が誕生し、コミンテルンから派遣された顧問たちが革命運動に深く参与したのである。ただし、革命後の中国、まして現代中国にこの革命がどのような作用及ぼしたかとなると、直接的というよりも間接的なものだったといえる。とはいえその影響はきわめて広範囲で、かつ本質的なものだったことは確かである。現代中国政治・社会の統治構造の柱が、1)権力主義（権力の維持、拡大が最高目的とする思想と政策）、2)エリート主義（意思決定は少数の選ばれた人間・集団によってなされるべきだとする思想と政策）、そして 3)実用主義（目的のためには手段を択ばないという思想と政策）という3つの大きな原理だと私は考えるが、それは空想から現実へと社会主義像が変転する中で生まれ、確立してきた原理であった。そのことを立証するために、1)ロシア革命とマルクス・エンゲルス、レーニンの空想的社会主義構想、2)スターリンによって実施されたソ連型社会主義経済の実態、3)中国に輸入されたソ連型モデルと毛沢東による修正、4)毛沢東の空想的社会主義理念とそれがもたらした結末、5)鄧小平による現実的経済体制の選択といった、社会主義像が空想から現実へと転換していく一連の過程とその結果について考察していこう。改革開放後中国経済は実質的には国家資本主義化し、マルクスはいうに及ばず、レーニンが構想した「古典的」社会主義像からも大きく逸脱していったが、それはあくまでも経済の領域であって、政治と社会の統治構造となると、レーニン、そしてスターリンによって完成された共産党の組織原理と党国家体制は、中国を含む残存する全ての「社会主義国」に強固に根付いている。他方毛沢東はソ連およびスターリン批判を通して自らの社会主義像を形成していくが、その空想性がもたらした悲惨な経済的破綻が鄧小平による実用主義思想の発展を促すことになった。

本稿では、こうしたマルクスから鄧小平に至る社会主義像の変遷の過程を、空想から現実へという視角から振り返り、毛沢東時代、そしてその後の中国でいかに社会主義像が変わり、またどのようにロシア革命以来の思想的・政治的遺産が現代中国の統治構造を形成するようになったのか、その要因について考えてみよう。